## 黙想:復活の水曜日 (エマオへの道)

黙想のテーマ:「エルサレム からエマオに向かう弟子た ち」「イエスはいつも私たち に同伴される」「聖体とみ言 葉において神を認める」

エルサレムからエマオに向かう弟子 たち

イエスはいつも私たちに同伴される

聖体とみ言葉において神を認める

日曜の夕方、弟子の二人が失望と思 案のうちに家へと帰っていきます。 その疲れたような足どりから、二人 の淋しさが伝わってきます。夢破 れ、悲痛な心のうちにエマオの村を 目指して出発したのは昼下がりでし た。主に全てを委ねたこれまでの生 活は、希望に満ちていました。しか し、あの日々の後、それが消え失せ てしまったのです。「ゴルゴダの丘 に立った十字架は、彼らが予想もし なかった敗北を、非常に雄弁に物語 るしるしでした」「」。かつて主のみ ことばを信じて従い、主と共にガリ ラヤやユダの地を巡りましたが、今 となってはその全てが終わったと考 えているのです。

今朝、イエスの墓が空っぽだという 知らせを聞きました。だれにも主の 御体の在り場所が分かりません。幾 人かの婦人たちが、生きておられる と言ったのですが、彼らはその証し に耳を傾けませんでした。希望を生

き生きと保とうとお互いに励まし合 うのではなく、失望感を二人で共有 してしまいました。メシアへの期待 を失い、他の弟子たちからも離れ て、全てを忘れて自己の生活をやり 直そうとエルサレムから離れること を決意したのです。しかしこれは良 い考えではありません。仲間から離 れてしまったら、悲しみを振り払う 事はますます難しくなります。とい うのも、信仰の歩みは、他者を必要 とするものだからです。将来の見通 しがはっきりせず、相応しい解決策 が見つからない時、身近な人の希望 が慰めとなります。「エマオに向か うあの二人のように失意のうちに歩 む人を見つけたなら、自らの名にお いてではなく、キリストの名におい て、また信仰をもってその人に近づ き、イエスの約束は必ず実現される こと (…) を教えて、安心させよう ではありませんかしった。

主は、あの二人の心の奥底で何が起こっているかを御存じです。主は、私たち一人ひとりになさったように、彼らに話しかけます。復活したキリストは、傍らを歩み、決して彼らを見捨てることのないことを分からせようと話しかけるチャンスを待ちます。

見知らぬ旅人が「近づいて来て、一緒に歩き始め」(ルカ24・15)ます。二人は復活した主をすぐに見分けることができません。なぜなイエとができませんではなかった」(ルカ24・16)からです。かつて二人は分からです。からでは見りで、奇跡でよったことでループの仲間で、奇跡でよったのグループの仲間で、奇跡でよったことであり、主の不在を感じるとしては見知らぬ旅人の一人だとし

か思えません。しかし実のところ、 イエスは常に彼らと共にいたので す。 | 私にはその場面が想像できま す。すでに夕やみが迫っている。そ よ風が吹き、周りを囲むのは稔りに 撓む穂をたたえた麦畑。オリーブの 老木も繁っている、鈍い光を浴びて 枝を銀色に輝かせながら。路上のイ エス。主よ、あなたは常に偉大な方 です。日常の雑事に取り紛れている 私たちを捜して、後を追って来てく ださると思うと、胸に熱いものがこ みあげてきます。主よ、光栄を内に 隠しておいでになるときも、あなた であることを悟ることができるよ う、鋭い頭脳と清らかな瞳、純な心 をお与えください一ा。

何らかの形で「エマオへの道は、すべてのキリスト信者が歩む道です。 それはすべての人が歩む道でもあります」図。この道においてイエスは 私たちの旅の道連れです。確かに、 私たち一人ひとりには、この二人の 弟子のようなところが少なからずあ ります。というのも、私たちは弱 く、時々、困難に遭遇すると落胆し がちだからです。そんな時にはイエ スの言葉への確信を新たにすること が必要です。「イエスはつねにわた したちの傍らで希望を与えてくださ り、わたしたちの心を温め、『前に 進みなさい。わたしはあなたと一緒 です。前に進みなさい』と声をかけ てくださいます | 151。 イエスは私た ちの歩みに同伴されます。「どんな に苦しい時、最悪なとき、敗北のと きにも、神はわたしたちと一緒につ ねに歩いてくださいます。それが主 のおられる場であり、それこそがわ たしたちの希望です。この希望を もって前に進みましょう。イエスは わたしたちの傍らで一緒に歩いてお られるのですから | 「610

神の現存とは、何よりも、私たちは 常に主の慈しみ深いまなざしのもと にある存在だと、納得することに他 なりません。神の現存とは、父親や 母親ができるだけ毎瞬間愛するわが 子を見つめつつ、その成長を見守 り、彼を励まし、その個性や他者と の触れ合いを楽しむように、主が私 たちをご覧になっているという安心 感です。

希望で燃え立たせてくれました。意 気消沈していた二人はその闇から救 い出されたのです。

イエスが「なおも先に行こうとされ た」とき、二人は「一緒にお泊りく ださい」と言いました。二人とも、 未だに同伴者が誰か分からなかった のですが、別れるのに耐え難く、引 き留めたのでした。イエスは立ち止 まり、彼らと家に入り食事の席につ き、「パンを取り、替美の祈りを唱 え、パンを裂いてお渡しになった」 (ルカ24・30)。常日頃、弟子たち にこのようにしておられ、最後の晩 餐の時も同じでした。「パンを裂い た」まさにそのとき、二人の目は開 き主を見ることができました。多分 その時初めて、マントで覆われてい た両手の傷に気づいたでしょう。そ のとたん、主のお姿は見えなくなり ました。「二人は、裂かれたパンの 前で驚きに満たされました。この裂

かれたパンはイエスの現存を表す新 しいしるしだったからです」<sub>□</sub>。

ある意味、この場面は、聖体を象っ ていると考えることができます。ミ サ聖祭では、イエスが現存されま す。それは、エマオの弟子たちの飢 えを満たした食べ物、つまり神のみ ことばとパンで、私たちを養うため なのです。「今日もわたしたちは、 イエスと語り合い、イエスのことば に耳を傾けることができます。今日 もイエスはわたしたちのためにパン を裂き、ご自身をわたしたちのパン として与えてくださいます | 181。こ うして私たちの「信仰は、人間の考 えによってではなく、神のことば と、聖体における神の現実の現存に よって養われ」

「」、私たちは信仰、 希望、愛のうちに日毎に若返るので す。「イエスは留まってくださいま す。キリストがパンを割かれたとき のクレオパとその仲間と同じよう に、私たちの眼も開かれる。そし

て、目の前から主の姿が消え去って、あたりは再び夜のとばりに包まれてしまったにもかかわらず、もう一度旅を始めることができる。このように大きな喜びは、胸に秘めておくことはできず、主について人々に伝えたくて仕方がなくなるからです」[110]。

マリア様にお願いしましょう。主が、人生の途上で私たちに話しかけられることに耳を澄まし、日々の出来事のうちに、またご聖体のうちに御子を見出すことができますように。

[1] フランシスコ、一般謁見演説、 2017年5月24日。

[2] 聖ホセマリア『神の朋友』316 番。

- [3] 聖ホセマリア『神の朋友』313 番。
- [4] ベネディクト十六世、「アレルヤの祈り」のことば、2008年4月6日。
- [5] フランシスコ、一般謁見演説、 2017年5月24日。
- [6] 同。
- [7] ベネディクト十六世、「アレルヤの祈り」のことば、2008年4月6日。
- [8] 同。
- [9] 同。
- [10] 聖ホセマリア『神の朋友』314 番。

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/meditation/mokusou-fukkatsu-no-suiyou/(2025/12/16)